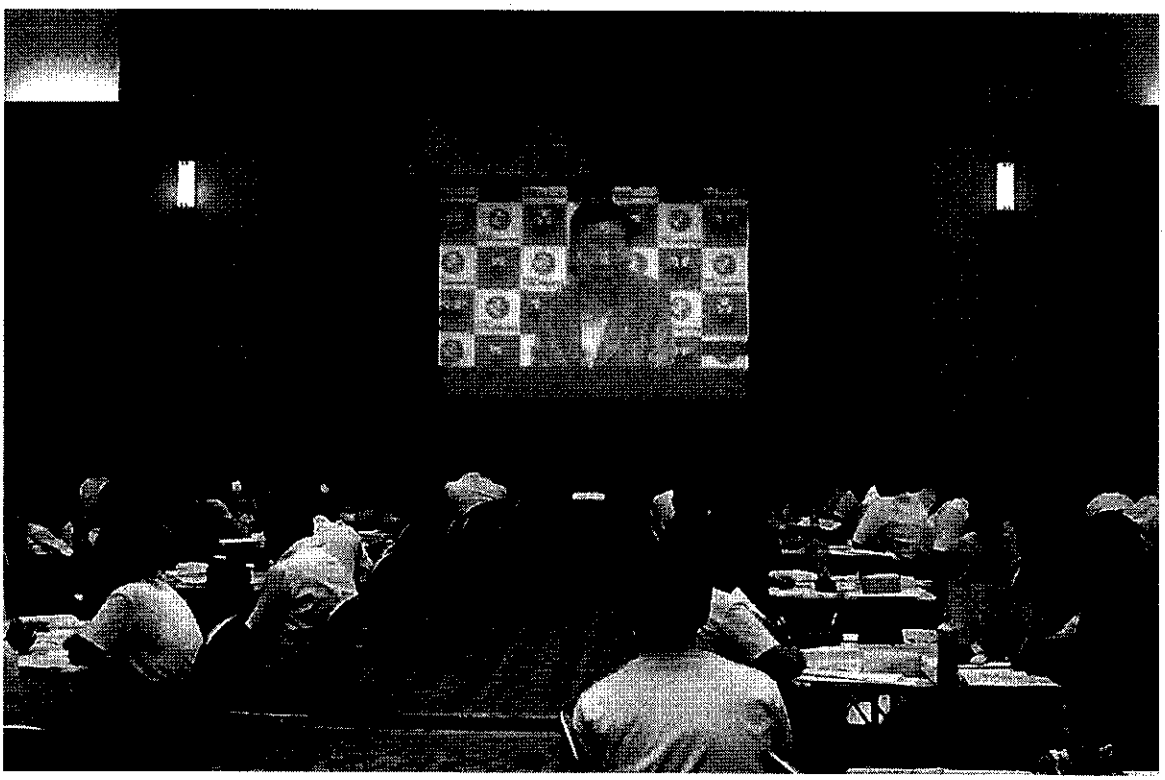
第 20 回
「北方領土と私たち」作文コンクール
入 賞 作 文 集



（第 39 回近畿ブロック少年少女北方領土研修）

北方領土返還要求京都府民会議
京都府北方領土教育者会議

目　次

			頁
1	発刊にあたって		1
2	実施要項		2
3	入賞作文の選考について		3
4	入賞者一覧		4
5	授賞式風景		6
6	歴代最優秀賞受賞者一覧		7
7	京都府北方領土教育者会議について		8
8	京都府北方領土教育者会議の取組状況		9
9	入賞作文		10
	○最優秀賞		
	京都府知事賞	京都府立菟道高等学校　秋丸千幸	
	京都市長賞	京都市立開晴小中学校　梶原十喜	
	○優秀賞		
	京都府教育委員会教育長賞	南丹市立殿田中学校　谷口陽飛	
	京都市教育長賞	京都市立久世中学校　上田陽菜	
	北方領土問題対策協会理事長賞	京都府立福知山高等学校附属中学校　曽根未來	
	北方領土問題対策協会理事長賞	京都市立開晴小中学校　芝辻初葉	
	北方領土返還要求京都府民会議会長賞	亀岡市立育親学園　野中未来	
	北方領土返還要求京都府民会議会長賞	京都市立勧修中学校　辰己心香月	
	京都新聞賞	南丹市立殿田中学校　藏心遥	
	京都新聞賞	京都市立嵯峨中学校　古川一歩	
	ＫＢＳ京都賞	京丹波町立瑞穂中学校　土屋野依人	
	ＫＢＳ京都賞	京都市立音羽中学校　藤原宏太	
	○特別賞		
	京都府北方領土教育者会議会長賞	京都府立須知高等学校　矢田優芽	
	京都府北方領土教育者会議会長賞	京都市立久世中学校　李美姫	
	○佳　作		
		南丹市立殿田中学校　小畠うた	
		南丹市立殿田中学校　髙橋彩芽	
		南丹市立園部中学校　北村美結	
		南丹市立園部中学校　上野陽菜	
		京丹波町立和知中学校　井上紗那	
		京都市立嵯峨中学校　福井菖	
		京都市立下京中学校　吉田匡	
		京都市立洛南中学校　中西ゆう	
		京都市立勧修中学校　後藤さくら	
		京都市立開晴小中学校　木下早詠	

発刊にあたって

二十回目の節目を迎えた「北方領土と私たち」作文コンクールに、今年度も多くの中学生・高校生が応募し、その思いを表わしてくれました。誰にとっても大切で、何物にも代え難いふるさとを失った元島民の方々の願いとは逆行するような国際情勢の中、このような若者たちの熱い思いに触れることは、非常に貴重で将来への希望につながる思いになります。

令和七年十一月十八日に、教育関係者を対象に開催した「ウクライナ侵攻と北方領土を考える特別講演会」の中で、神戸学院大学経済学部教授　岡部芳彦氏にご講演いただきました。特に印象的だったのが、「この問題は、何もしなければ一年で消えてしまうだろう。」という言葉でした。戦後八十年以上が経過し、北方領土問題の風化、関心の低下という課題が顕著になってきています。しかし一方で、八十年という長い時間の経過があったにも関わらず、この問題に京都府の若者が触れ、心を動かし、様々な視点から「自分なら」と考えを巡らせている背景には、これまで多くの方々が強い思いを持って動き、忘れてはいけない問題が確かにここにあるというバトンを引き継いでくださったという事実があるからだと考えます。

この営みはまぎれもなく、これからの日本をどのように創っていくのかという「未来への希望」を見出していく活動そのものでもあります。

京都府知事賞を受賞された京都府立莵道高等学校　秋丸千幸さん、京都市長賞を受賞された京都市立開晴小中学校梶原　十喜さんの作文からも、北方領土問題について深く考えることで、この問題は過去の出来事でなく、むしろ「未来」を自分たちがどのように創っていくのかということであるという思いと、「未来」への願いを読み取ることができました。これもバトンを引き継いでくださった関係者の皆様のご理解とご支援の賜物です。今後とも一層のご支援を心よりお願い申し上げます。

結びにあたり、応募していただいた生徒の皆さんや、ご指導くださった各校の先生方に感謝申し上げますとともに、ご後援いただきました京都府、京都市、京都府・京都市教育委員会、京都府・京都市中学校長会、京都府公立高等学校長会、京都府市町村教育委員会連合会、京都府私立中学高等学校連合会、独立行政法人北方領土問題対策協会、京都新聞、産経新聞京都総局、ＫＢＳ京都の皆様をはじめ、関係の皆様方に厚くお礼申し上げ、発刊の言葉とさせていただきます。

令和八年二月十一日

北方領土返還要求京都府民会議
会長　荒巻　隆三

京都府北方領土教育者会議
会長　平井　祐子

令和７年度
第20回「北方領土と私たち」作文コンクール実施要項

１　趣　旨　　京都の中学生や高校生等が、北方領土が歴史的な経過や国際法に照らして日本の固有の領土であることを正しく理解し、北方領土に対する関心を高めることを目的としてこの事業を実施する。

２　主　催　　北方領土返還要求京都府民会議　京都府北方領土教育者会議

３　後　援　　京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会
京都府中学校長会、京都市中学校長会、京都府公立高等学校長会
京都府市町村教育委員会連合会、京都府私立中学高等学校連合会
（独立行政法人）北方領土問題対策協会、京都新聞、産経新聞京都総局
ＫＢＳ京都

４　テーマ　　「北方領土と私たち」にかかわる内容であること（題名は自由）

５　募　集　（１）対　　象　　京都府内の中学校、高等学校、義務教育学校または特別支援学校に在学している者
（２）募集期間　　令和７年６月２日（月）～令和７年12月５日（金）
（３）作品規定　　原稿用紙（400字詰）３枚程度
（４）応 募 先　　京都府北方領土教育者会議事務担当
〒629-1192　京都府船井郡京丹波町本庄ウエ16
京丹波町教育委員会　小森宛　TEL 0771-84-0028

６　審　査　　主催者において選定した審査員により審査

７　表　彰　（１）賞の設定
最優秀賞　２点・京都府知事賞・京都市長賞　各１点
優 秀 賞　12点・京都府教育委員会教育長賞　１点
・京都市教育長賞　１点
・北方領土問題対策協会理事長賞　２点
・北方領土返還要求京都府民会議会長賞　２点
・京都新聞賞　２点
・ＫＢＳ京都賞　２点
特 別 賞　・京都府北方領土教育者会議会長賞　２点
佳作・入選　若干点

（２）表彰式
令和８年２月上旬
（北方領土返還要求京都府民大会会場にて表彰予定）

８　その他　・応募の際は別紙の応募一覧表を添えて下さい。
・最優秀賞・優秀賞・佳作の作文は作文集に掲載されます。
・中学生の上位入賞作品は北方領土に関する全国スピーチコンテストに応募します。

問い合わせ先	京都府北方領土教育者会議事務担当 （京丹波町教育委員会　小森　誠）
	0771-84-0028

入賞作文の選考について

1　応募の状況

応募募校：１７校	応募点数：９２３点

2　選考委員と選考基準

（１）選考委員会の構成

氏　名	所　属　等　（　）内は教育者会議の役職
平井　祐子	南丹市立殿田中学校校長（会長）
森　　茂昭	京都市教育委員会学校指導課首席指導主事（副会長）
山崎　直人	京都市立嵯峨中学校校長（運営委員）
田華　　茂	京都市総合教育センター副主任指導主事（運営委員）
野間　慎吾	京丹波町立瑞穂中学校教諭（運営委員）
森　　哲也	南丹市立園部中学校教諭（運営委員）
小森　　誠	京丹波町教育委員会社会教育課社会教育指導員（運営委員）
弘田　真基	京都市立久世中学校教諭
梅田　遼平	京都市立洛南中学校教諭
亀井　隆次	京都市立栗陵中学校教諭
藤本　孝博	京都市立嵯峨中学校教諭
多田　大輝	京都市立西ノ京中学校教諭
後藤浩太朗	京都市立花山中学校教諭
松本　和久	京丹波町教育委員会教育長（顧問）
西田　三郎	元京都府立林業大学校職員（顧問）
宮田　　功	京都市教育委員会学校指導課参与（顧問）
野村　啓介	北方領土返還要求京都府民会議事務局長
西岡　　歩	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長
法谷　道哉	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長

（２）選考基準

・北方領土について正しい認識や理解に基づき記述されているか。
　（正しい認識・理解の視点）
・北方領土問題に関心を持ち、主体的な姿勢で学ぼうとしているか。
　（主体的な態度・関心・意欲の視点）
・北方領土問題の解決に向けて自らができることを考え、取り組もうとしているか。
　（将来への展望の視点）
・上記の視点を持ち、読み手に共感を与える内容であるか。
　（啓発資料としての価値の視点）

第20回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

応募校数：１７校　　応募作品数：９２３点

氏　　名	学　校　名	学　年
最優秀賞（京都府知事賞）		
秋丸　千幸	京都府立莵道高等学校	１年
最優秀賞（京都市長賞）		
梶原　十喜	京都市立開睛小中学校	７年
優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）		
谷口　陽飛	南丹市立殿田中学校	３年
優秀賞（京都市教育長賞）		
上田　陽菜	京都市立久世中学校	１年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
曽根　未來	京都府立福知山高等学校附属中学校	１年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
芝辻　初菜	京都市立開睛小中学校	７年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
野中　未来	亀岡市立育親学園	８年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
辰己　心香月	京都市立勧修中学校	１年
優秀賞（京都新聞賞）		
藏　　心遙	南丹市立殿田中学校	２年
優秀賞（京都新聞賞）		
古川　一歩	京都市立嵯峨中学校	１年
優秀賞（ＫＢＳ京都賞）		
土屋　野依人	京丹波町立瑞穂中学校	２年
優秀賞（ＫＢＳ京都賞）		
藤原　宏太	京都市立音羽中学校	３年
特別賞（京都府北方領土教育者会議会長賞）		
矢田　優芽	京都府立須知高等学校	１年
特別賞（京都府北方領土教育者会議会長賞）		
李　　美姫	京都市立久世中学校	１年

※　氏名等には原則として常用漢字を使用しています。

京都市立開睛小中学校、亀岡市立育親学園は９年制で表示しています。

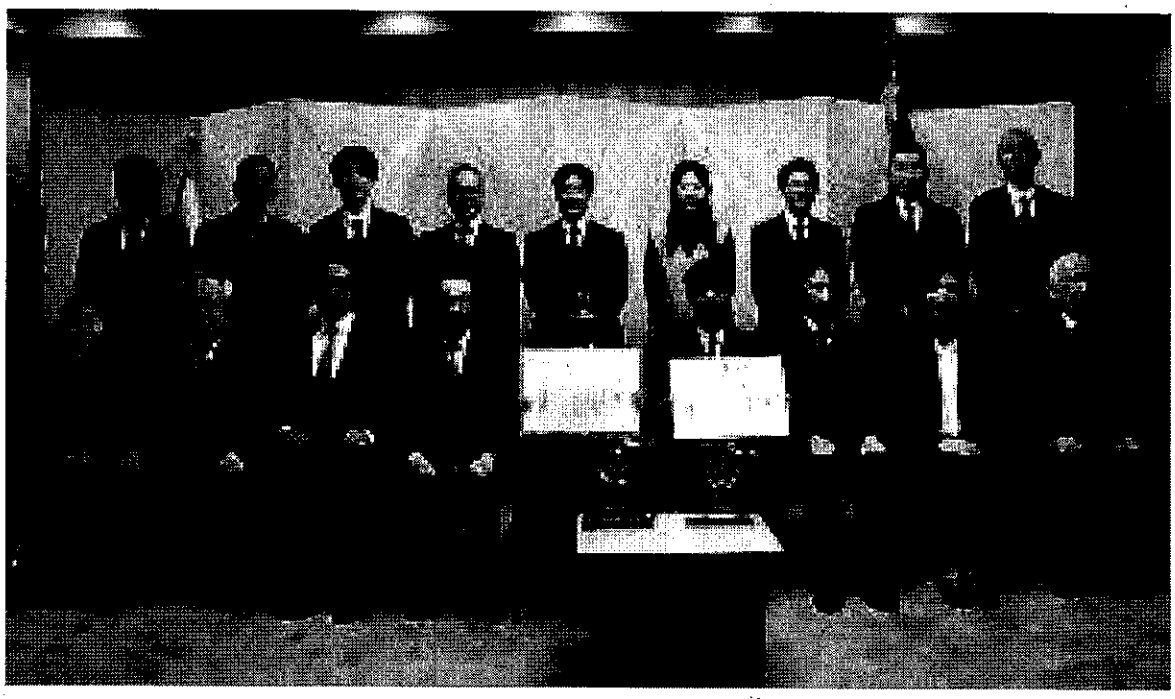
第20回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

	氏　　名	学　校　名	学　年
佳作	小畠　うた	南丹市立殿田中学校	２年
	高橋　彩芽	南丹市立殿田中学校	２年
	北村　美結	南丹市立園部中学校	２年
	上野　陽菜	南丹市立園部中学校	２年
	井上　紗那	京丹波町立和知中学校	３年
	福井　　菖	京都市立嵯峨中学校	１年
	吉田　　匡	京都市立下京中学校	１年
	中西　ゆう	京都市立洛南中学校	２年
	後藤　さくら	京都市立勧修中学校	１年
	木下　早詠	京都市立開睛小中学校	７年
入選	船坂　夢華	亀岡市立育親学園	８年
	神谷　茜音	京丹波町立蒲生野中学校	２年
	戸嶋　茉央	京都府立莵道高等学校	１年
	大塚　春翔	京都府立木津高等学校	１年
	岡田　琥太郎	京都府立木津高等学校	３年
	山本　　杏	京都市立音羽中学校	３年
	宮崎　絵梨	京都市立洛南中学校	２年
	菅沼　　龍	京都市立嵯峨中学校	１年
	前田　蹴斗	京都市立勧修中学校	１年
	加藤　縁樹	京都市立下京中学校	１年

最優秀賞などの授賞式

京都府知事賞・京都府教育委員会教育長賞の授賞式

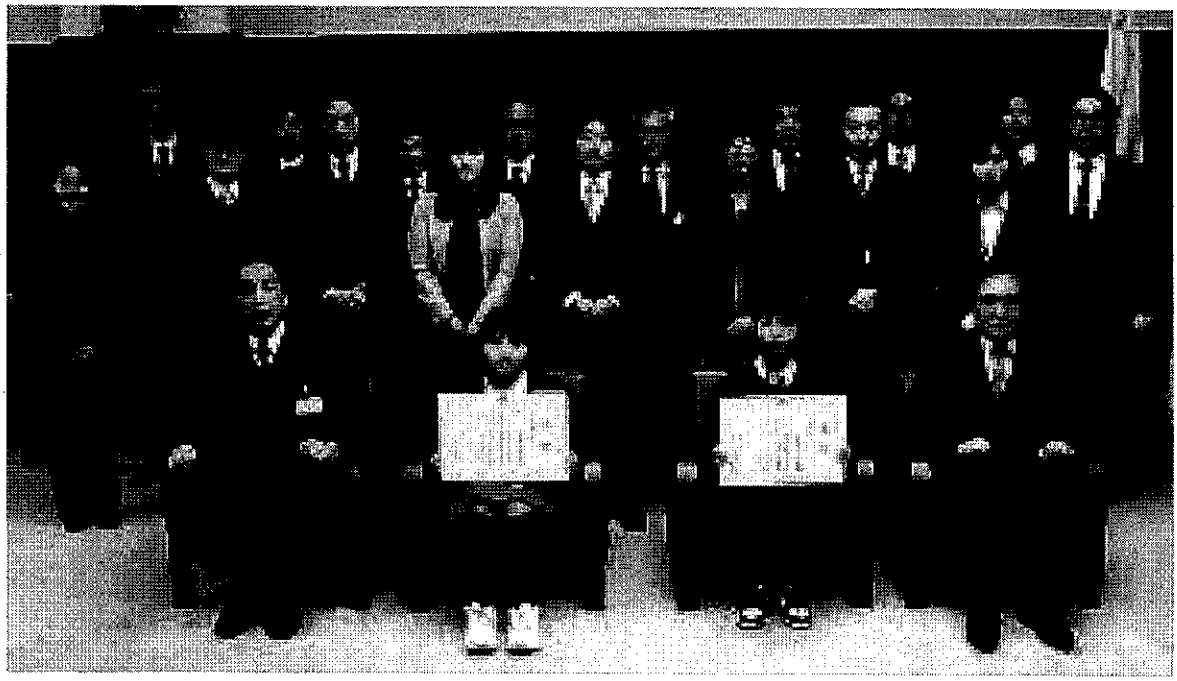
令和８年１月 14 日　京都府庁



西脇隆俊京都府知事、山下俊彦教育監兼学校危機管理監から賞状が授与されました。

京都市長賞・京都市教育長賞の授賞式

令和８年１月 13 日　京都市役所



松井孝治京都市長、稲田新吾京都市教育長から賞状が授与されました。

京都府北方領土教育者会議について

1　設　　立　　平成18年3月

2　設立趣旨　　北方領土問題の解決のために次代を担う青少年が北方領土について関心を持ち、正しい理解を深めるために教育関係者の会を結成して諸活動を行う。

3　会　　員　　京都府内の中学校・高等学校教員等

4　主な取組　　○「北方領土と私たち」作文コンクールの実施(平成18年度～)
○北方領土問題に関する特別講演会の開催
○北方領土教育実践推進校指定事業の実施（２校）
○各種研修会等への教員・生徒の派遣
・四島交流事業（ビザなし交流）…休止中
・現地視察事業…生徒、教職員、教育委員会関係者
・近畿ブロック研修会…近畿各府県
○北方領土に関する全国スピーチコンテストへの応募　等

5　組織体制　　会長（１）　副会長（１）　事務局長（１）　事務局次長（１）
運営委員（若干名）

＜北方領土に関する全国スピーチコンテスト入賞者（入賞は全国で10名）＞

年　度	受賞名	氏　名	学校名
平成25	奨励賞	岡嶋良太郎	京都市立伏見中学校
平成26	北対協理事長賞	花阪　大輝	京都府立園部高等学校附属中学校
平成28	審査委員特別賞	高屋　瞳華	南丹市立園部中学校
平成29	奨励賞	藤内　空菜	南丹市立園部中学校
令和元	審査委員特別賞	上山　莉奈	南丹市立園部中学校
令和2	北対協理事長賞	日下部佳子	南丹市立園部中学校
	奨励賞	河原　奈那	南丹市立園部中学校
	奨励賞	山下　青葉	向日市立寺戸中学校
令和3	審査委員特別賞	八木梓緒音	南丹市立園部中学校
	審査委員特別賞	岸本まりな	亀岡市立亀岡川東学園
	奨励賞	久保田美優	南丹市立園部中学校
	奨励賞	田中　珠生	京都市立下京中学校
令和4	奨励賞	加藤　心菜	南丹市立園部中学校
	奨励賞	山口　采乃	南丹市立殿田中学校
	奨励賞	辻本　美玖	南丹市立園部中学校
令和5	北対協理事長賞	楓　　るり	南丹市立殿田中学校
	奨励賞	田中　　周	京都市立下京中学校
令和6	審査委員特別賞	吉田　太陽	南丹市立園部中学校

京都府北方領土教育者会議の取組状況

1　「北方領土と私たち」作文コンクールへの応募校数・応募作品数

第１回	２０校	４０４点
第２回	２５校	８９５点
第３回	３３校	１，９３８点
第４回	２０校	１，３０４点
第５回	２４校	１，９７９点
第６回	１５校	１，４８１点
第７回	１８校	１，４３０点
第８回	１８校	１，７４０点
第９回	１８校	１，５４５点
第10回	２２校	１，４７１点
第11回	１８校	１，３０２点
第12回	２４校	１，４４８点
第13回	２１校	１，５９１点
第14回	２１校	１，５１１点
第15回	２３校	１，４２９点
第16回	２２校	１，７１５点
第17回	２１校	１，６１４点
第18回	１６校	１，０４０点
第19回	１８校	１，１０９点
第20回	１７校	９２３点

2　各種研修会への参加状況　　（参加者実績：教員数＋生徒数）

年度	北方四島交流	教育指導者研修（根室市）	青少年等視察研修（根室地域）	近畿ブロック研修会（６府県）
平24	国後３	2		17（滋賀）
25		2	28	43（京都）
26		2		22（大阪）
27	国後２、択捉１	2	20	18（兵庫）
28		2		9（奈良）
29		2		18（和歌山）
30	択捉１	2	20	14（滋賀）
令１		2		48（京都）
2	新型コロナウイルス感染症のため中止			
3	新型コロナウイルス感染症のため中止			4（兵庫）ｵﾝﾗｲﾝ
4	休止中	未実施	23	15（奈良）
5	休止中	2		9（和歌山）
6	休止中	指導主事１	25	11（滋賀）
7	休止中	2		27（京都）

3　実践推進校事業指定校

年度	学校名
平成19	園部高校
	八条中学校
20	園部高校
	伏見中学校
21	園部高校
	大枝中学校
22	東輝中学校
	山科中学校
23	東輝中学校
	嵯峨中学校
24	日置中学校
	西賀茂中学校

年度	学校名
25	南桑中学校
	烏丸中学校
26	城北中学校
	中京中学校
27	和知中学校
	上京中学校
28	蒲生野中学校
	梅津中学校
29	園部中学校
	北野中学校
30	殿田中学校
	桂川中学校

年度	学校名
令和１	亀岡川東学園
	双ケ丘中学校
2	八木中学校
	開晴小中学校
3	瑞穂中学校
	久世中学校
4	殿田中学校
	二条中学校
5	白糸中学校
	京都御池中学校
6	亀岡育親学園
	加茂川中学校

入賞作文

最優秀賞（京都府知事賞）

島々が帰ってくる未来を信じて

京都府立莵道高等学校
一年　秋丸　千幸

地図の片隅に、小さな四つの点がある。択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島。北海道の北東に寄り添うように浮かぶその島々は、私にとって長い間、ただの名前にすぎなかった。しかし、それらは日本固有の領土でありながら、今もロシアの支配下にある。かつてそこには、浜辺を駆ける子供たちの笑い声や漁師たちが魚を捕っている姿があっただろう。

だが、一九四五年八月、戦争終結直前にソ連軍が進攻し、その幸せな日常を突如断ち切った。住民は一夜にして家を追われ、慣れ親しんだ海や土地と離れなければならなかった。残された場所、家はロシア語の声であふれ、四つの島は新しい時代へと押し流された。

八十年以上経った今でも、領土問題は解決されていない。日露の首脳が会談を重ねても状況は変わらない。日本とロシア、それぞれの国同士の主張、歴史の重み、国際情勢が複雑に絡み合い、容易には進まない。時が経てば記憶は薄れ、島々は地図の片隅で静かに忘れられてしまうかもしれない。だからこそ、私たち若い世代が無関心でいるわけにはいかない。

私が考える行動は三つある。第一に「知る」こと。教科書の数行にとどまらず、自ら資料等を探し、歴史をたどる。第二に「語る」こと。家族との普段の会話や、友達との何気ないやりとりにこの問題をそっと取り入れる。小さな声も、広がれば確かな流れになる。第三に「発信する」こと。ＳＮＳや学校での発表を通じて、同世代に関心を広げることだ。私たちには、情報を一瞬で共有できる力がある。

加えて、小さな交流を大事に広げていくことが必要だ。国家の交流は止まっても、人と人との信頼は少しずつ築くことができる。北海道では、これまでロシアとの文化イベントや北方四島交流事業などといった交流が行われていた。そこに参加する一人ひとりの笑顔が、小さなつながりを結んでいく。政治は時に停滞するが、人と人とのつながりは前へ進めることができるのだ。

未来を想像する。もし、島々が返還されたら漁業や観光が再び活気を取り戻し、日本語とロシア語の看板が並ぶ港町がよみがえるだろう。かつての住民と新しい住民が肩を並べて浜辺を歩き、子どもたちが二つの言葉で遊び歌を歌う。そんな日常は決して遠い夢ではなく、可能な未来だと私は思う。

北方領土は、歴史とこれからをつなぐ場所だ。小さな関心が集まれば、それはやがて大きな潮流になる。私は信じている。いつかあの島々で、日本語とロシア語の笑い声が同じ風に運ばれる日が来ることを。そのために、私はこれから、北方領土について学び、調べ、未来をつなぐ一歩を踏み出したい。

最優秀賞（京都市長賞）

国境を越えた救いの舟

京都市立開晴小中学校
七年　梶原　十喜

北方領土とは、北海道根室市の北東に位置する歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の四つの島々のことをいいます。これらの島々は、「北方四島」とも呼ばれ、長い間、日本の領土でした。

しかし、第二次世界大戦で日本が敗戦した後、一九四五年に旧ソ連軍がこれらの島を占領しました。その後、ソ連がロシア連邦となった現在に至るまで、日本はこれらの島の返還を求め続けています。日本人は、「もともと日本の島だったのだから返してほしい」という思いを抱き、ロシア側との交渉を何度も行ってきましたが、解決には至っていません。

私はこの問題について調べる中で「舟」という本に出会いました。この本には、北方領土の一つである歯舞群島で、戦後、間もなく起こった、ある感動的な実話が書かれていました。

物語の主人公は、内山浩という日本人漁師です。彼は戦後、志発島に残っていた日本人の一人で、ロシアから移住してきた人々と一緒に暮らしていました。ある日、日本人が島から引き揚げることが決まると、長年、一緒に過ごしてきたロシア人の子どもたちは大きなショックを受けます。特に、親しくしていた日本人の友達と別れることを悲しんだ六人の子どもたちは、小舟に乗って日本人たちを追いかけようとしました。しかし、濃い霧の中で舟が流され、子どもたちは海で遭難してしまいます。

それを知った内山さんは、命の危険があることをわかっていながら、ただ一人で小舟を出して、子どもたちの救助に向かいました。高い波と悪天候の中、何とか子どもたちを見つけ出し、無事に連れ帰ったのです。相手が「敵国の子ども」であっても、人として当然の行動をとった内山さんの勇気に私は強く心を打たれました。

この話からわかったのは、「国と国」では争っていても「人と人」では心が通じ合えるということです。ロシア人の家族は命をかけて自分たちの子どもを助けてくれた内山さんに深く感謝し、その出来事は長く語り継がれました。

一方で、国同士の関係になると、なかなか物事がうまく進みません。互いに自分たちの利益ばかりを主張し、相手を理解しようとする気持ちが足りなくなるように感じます。そのため、北方領土問題もなかなか解決しないのだと思います。けれども、内山さんのような行動があったことを知った今、私は、たとえ国が争っていても、人と人との間に信頼や思いやりがあれば少しずつでも関係は良くなっていく、と信じたいです。

北方領土はまだ返ってきていませんが、このような物語を知ったことで、私にもできることがあると感じました。まずは相手を知ろうとすること、そして、歴史に目を向け、話し合う姿勢を持つことが大切だと思います。未来をつくっていくのは、私たち一人ひとりの気持ちと行動です。北方領土問題の解決もそこから始まるのではないかと思います。

優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）

広がりの可能性を信じて

南丹市立殿田中学校
三年　谷口　陽飛

「返せ！北方領土」「返還！北方領土」この言葉は北海道の中標津町で書かれていた看板だ。初めて北海道に降り立ち、この看板を目にした時、日本固有の領土である「北方領土」を奪われた悲しみや憎しみを想像することが難しかった。だが、今は極めて重い言葉だと受け止めている。

元島民の鈴木咲子さんの講話を聴いた時は、驚きでいっぱいだった。過酷でひどい実体験を聴いて、今、私が過ごしている日常がどれだけ幸せなのかが理解できた。一方、北方領土問題はロシアとウクライナの紛争の影響を受けて日本とロシアの関係が最悪の状況になっている。誰もが幸せに生き、大切な場所やかけがえのない存在を失うことなく過ごしていくためにはこの北方領土問題を風化させない、この問題をもっとみんなに広げていくことが不可欠だと改めて感じた。

私はこの北方領土問題について学んでいく中で、主権が意外にも身近にあるものだということを感じている。授業で主権とは、国を統治し、自分の国を守る力のことだと学んだ。しかし、北方領土である四島はロシアに不法占拠されており、国家の主権が侵害されている状況にある。これは単に四島がどちらのものなのかというだけの問題ではない。地図上の線が変わるだけではなく、そこで暮らしていた人たちの普段の幸せが奪われるということなのだ。もし、自分の住んでいる町が急に「今日から別の国です」と言われたら…そんなことを想像しただけで感情が乱れた。家族と暮らしていた平穏な日々と大切な場所が一瞬にして無くなってしまう。その怖さを自覚した時、主権というものの重さをはっきり感じた。

主権は今を生きる人だけでなく、未来の世代の人たちにもつないでいくべきバトンであると思う。だから、この北方領土問題に対して関心を持ち続けることは、巡り巡って自分のことだけでなく「誰かの幸せ」に結びついていくのだ。それは日本という国の尊厳を守ることであり、国際社会において、平和な国を築いていくという大きな目標にも関わるものだからだ。私たちが北方領土問題に関心を持つことは、これからの日本を作る基盤になる。だからこそ目の前にある問題に真剣に向き合い、自分事として捉えることが大切なのだ。

今の自分たちには国や世界を動かす力はないし、自分や周りの人たちが声をあげても聞いてくれる人はごく一部の人だけかもしれない。それでも傍観しているだけであったり、何もせずに終わらすことはできない。だから私は諦めずに、一人一人にできる署名活動やＳＮＳを活用することでたくさんの人にこの問題を伝えようと思う。声を上げ続けることでその問題に興味や関心を持ち、振り向いてくれる人は必ずいる。その可能性を信じて、お互いの手を取り合うことが重要だと思う。

私は、北方領土返還に向けて、今一度自分たちにできることを探し、考え、行動することを宣言する。

優秀賞（京都市教育長賞）

知ろうとする意欲

京都市立久世中学校
一年　上田　陽菜

普段、私が寝ている布団の上に兄が乗っていると、少し嫌な気持ちになります。兄とは普通に会話するし、決して仲が悪いわけではないのですが、自分の大事なスペースに他の人が入ってくるとちょっと不快な気持ちになってしまいます。

人間二人だけでもこのような感情が生まれるのだから、日本とロシアという国同士で繰広げられている北方領土問題は、私が想像も出来ないような複雑な感情や経済的な事情があると思います。だからこそ、第二次世界大戦後からソ連（現ロシア）が、本来、日本固有の領土であるはずの北方四島を、武力で半強制的に不法占拠している状況を、今日に至るまで解決できていないのだと思います。

現在、北方領土には日本人は一人も住んでいません。私が気になったのは、ソ連に不法占拠される前から元々北方領土で暮らしていた日本人の方々のことです。その当時、どのようなかたちで島を追い出されたのか、今はどのように暮らしているのか、また、今日における北方領土問題をどのように思っておられるのか…。元島民の方々はすでに亡くなっておられるか、または、ご高齢の方がほとんどとのことなので、私が直接お話を聞くことは難しいのですが、『北方領土問題対策協会』という公式ウェブサイトに元島民の方々が北方領土について語った歴史的証言がいくつか載っていました。

その中で、私にとって特に衝撃的だったのが、鈴木咲子さんが語った択捉島でのソ連軍の侵攻のお話でした。当時、ソビエト兵が黒光りした銃を片手に、土足のまま自分の家に上がり込んできたところを実際にその目で目の当たりにしたとのことです。腕時計や万年筆等を探し回られ、略奪されたらしく、それはもう恐怖や怒り、悲しみでいっぱいだったことでしょう。そういった体験を実際にされてきた元島民の方々は、当然のことながら、多くの方が北方領土返還に対する強い思いを語っておられました。

そのような元島民の方々の実際の証言録を読めば読むほど、北方四島を不法占拠しているロシアという国に対して、私はどうしても否定的な気持ちになりました。後日、その話を父に伝えると、国後島でロシア人の現島民達が、日本人の元島民達のために墓地の清掃作業を行った、というＮＨＫのウェブニュースを紹介してくれました。今年、二〇二五年七月半ばを過ぎたごく最近のことでした。今現在、北方領土に行くことができず、先祖のお墓参りもできない日本人の元島民達のことを思いやっての行動と、ＮＨＫの取材に対してロシア人の島民の男性が話していました。この事実を知って、私は少し心が温まるような気持ちになりました。

北方領土問題に対しては、正直なところ、特に私達若年世代は、ほとんど他人事のように思っている人が、残念ながら大勢いると思います。かくいう私もその一人でした。

しかし、今回、北方領土について私なりに色々と調べ考えるきっかけを得たことで、未熟ながらも、北方領土問題を少し身近に感じることができました。北方領土に限らず、あらゆる社会問題に対して、とにかくまず関心を持ち『知ろうとする意欲』をもっと高めていきたいと思います。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

Чудо родителя и ребенка

～突如断たれた交流と変わらぬ想い～

京都府立福知山高等学校附属中学校
一年　曽根　未來

「子どもです。息子。」

色丹島出身の得能宏さんの一言で、北方領土、そしてロシアに対する見方が変わった。今までは北方領土を日本の領有権問題の一つ、そんな四島を奪ったロシアに日ソ中立条約を破ってまで何がしたいのかという疑問と共に嫌悪感のようなものがあった。

この作文を書くにあたり、両国は北方領土に対してどんな気持ちを持っているのか調べるとあるニュースが目に止まった。ロシア人と元島民が交流を通して絆が芽生えるというものだった。興味を持ち、見てみると一人の男性が故郷を奪われて憎むはずのロシア人男性を自分の息子として紹介していた。男性の言葉で北方領土から、領土問題だけでなく両国の人々が互いに故郷と思っているからこそ生まれた絆があると知った。そしてロシアに対しての嫌悪感から、日本の元島民の人々のように北方領土を故郷だと思う人々には何も罪はないという気持ちが生まれてきた。それと同時に日本、そしてロシアに対しても交流の場を設けてくれてありがとう、そんな感情があった。また、現島民のロシア人と元島民の間には「国境」も「領土問題」もない。北方領土はお互いのとても大切な故郷なのだということを強く感じた。しかし、新型コロナウイルスの流行やロシアのウクライナ侵攻などの影響によって突如、交流が中断された。交流が無くなると会えない二人の親子。けれど二人の想いは変わらず、ロシア人のトマソンさんは今現在も色丹島にある得能さんの先祖の墓を守り続けている。いつかまた会える日を願って。もしも自分が、かつて住んでいた故郷を奪われたら得能さんとトマソンさんのように認め合っていけるのだろうか？私が得能さんの立場だったらどう接していただろう。きっと、いつまでもロシアを憎んでいたと思う。だからこそ、この二人の関係を奇跡だと感じているのだ。はじめは日本が抱える領土問題の一つで四島ある。それくらいしか知らずにもうロシア人が住んでいるから、返還なんて無理だ、そんな軽い気持ちでいたことが恥ずかしい。共に抱える問題について、「自分の国の領土なんだ！」そんなことばかりを主張し続けるのではずっと北方領土は〝領土問題〟でしかなくなってしまう。私は得能さんとトマソンさんの出会いから、北方領土は領土問題という場所だけではなくて敵同士が友好関係を取り戻す場だと思うし、そうしてほしいと考えている。

日本とロシアは、国としては敵国なのかもしれない。でもきっと日本が好きなロシア人、ロシアが好きな日本人がいる。私もその一人だ。これから、北方領土問題やその他の領土問題解決に向けて、返還要求に関するイベントに参加するなど小さなことから積極的に参加していきたい。またいつか、北方領土での交流が復活し、人々が再会できるように。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

偏見の連鎖

京都市立開晴小中学校
七年　芝辻　初菜

「もう、戻ってこないと思いますよ。」

北方領土についてどう思いますか、と母が尋ねるとタクシーの運転手さんはそう言っていました。夏休みに田舎から京都に帰ってきた駅からの道中のことでした。

タクシーに乗った時には、沖縄での戦争についてのラジオが流れていましたが、運転手さんはラジオを消して、車を走らせながら戦争についてたくさんお話をされた後のことでした。

私は運転手さんの返事があまりにも即答だったので、とてもびっくりしたことを覚えています。

北方領土とは、北海道本島の東の沖合にある四つの島々、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島のことを言います。そして、その四つの島々がどの国に属しているのか、ロシアと日本の認識がずれているのが問題です。

この領土問題が始まってから、今年でちょうど八〇年が経ちました。ことの始まりは、終戦直前に日本の領土であった南樺太や千島列島にソ連が攻め込んできたことです。

今年の八月二二日に発行された毎日新聞に大横綱の大鵬が遭遇した「三船遭難事件」についての記事が掲載されていました。彼は終戦後、日本が放棄した領土の一つ、南樺太出身です。ソ連が南樺太に攻め込んできたため、多くの人と北海道本島に船で逃げていました。大鵬が港に降りた直後、まだたくさんの女性や子ども、老人を乗せた船はソ連の潜水艦に撃沈されました。三隻合わせておよそ一七〇〇人の犠牲が出たそうです。

タクシーの運転手さんが「もう戻ってこない」と言っていたのは、このようなことがあり、ロシアを信用していないからかもしれません。

一九五一年にサンフランシスコ講和条約を、ソ連などを除く四八か国と結び、南樺太と千島列島を放棄しましたが、その中に北方領土は含まれていませんでした。ロシアと日本の領土問題についての認識がずれているのは、日本とソ連がその場に立ち会って話し合わずに決めてしまったからだと思いました。

終戦から五六年後の二〇〇一年、イルクーツク声明でようやく日本とロシアが共に解決に向けて話し合わなければいけないと宣言されてから二四年が経ちました。しかし、今でもこうして私たちが作文を通してこの領土問題について考えなければいけない、解決されていないのが現状です。それでも一九九二年から、相互理解を目的に地道に交流を深めています。

私は、この作文を書き始める前はロシアにばかり悪い印象を持っていましたが、作文を書くために北方領土問題の歴史について調べるにつれ、二つの国々の認識がずれてしまった理由が分かってきて、日本も考えるべき点があると感じました。

数年前からニュースで取り上げられているウクライナとロシアの戦争を遠い国同士の話だと思っていたけれど、日本が抱えている領土問題と共通点が沢山あると思います。この作文を書くにあたって、インターネットで「北方領土　始まり」と調べると、日本固有の領土とされているが、第二次世界大戦後にソ連によって不法占拠され、現在もロシアが支配していると、ＡＩによって日本視点で説明されていました。ロシアで同じことを検索すると、果たしてどのように説明されるのだろうと疑問に思いました。

みんなが北方領土問題に関心を持ち、解決しようと思うところから始めて、最終的にはみんなで解決できればいいなと思います。歌手なら歌にのせて、高齢者の方なら選挙に参加するなど、それぞれの立場を活かして協力できると思います。仕事も選挙権もない私たちにできることは、北方領土問題に関心を持ち続けていくことだと思います。私はこれからも友だちやタクシーの運転手さんのような考えの人などと交流をして、偏見の連鎖を少しでも良い方へ向けていきたいです。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

北方領土を知って

亀岡市立育親学園
八年　野中　未来

日本列島の北東には、歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の四つの島があります。これらは「北方領土」と呼ばれています。北海道のすぐ近くにあり、戦前までは多くの日本人が住んでいました。豊かな海で魚や昆布をとり、広い畑で農業を行い、自然の恵みを受けながら暮らしていたのです。しかし、第二次世界大戦が終わった直後、ソ連軍が突然これらの島を占領し、そこに住んでいた人々は家や土地を追われることになりました。この悲しみや悔しさは、今も元島民やその家族の心に残っています。

戦後八十年がたった今でも、北方領土は日本に返されていません。戦争が終わった後、多くの領土問題は整理されましたが、この問題だけはいまだに解決していないのです。元島民の方々の平均年齢はすでに八十歳をこえており、「もう一度だけ故郷を見たい」という願いもかなわないまま亡くなる人もいます。私たち戦後生まれにとっては、北方領土を直接見たことある人はほとんどいません。だからこそ、この問題を正しく理解し、忘れないように語り継ぐことがとても大切なのです。

では、なぜ返還が難しいのでしょうか。理由の一つは日本とロシアの主張の違いにあります。ロシアは、戦争で得た「勝利品」だと考え、自分たちの領土だと主張しています。しかし日本は、これらの島々は昔から日本の領土であり、戦争により一方的に奪われたのだと考えています。この立場の違いが大きく、平和条約を結ぶこともできずにいます。

さらに、北方領土には経済的にも大きな価値があります。周辺の海は世界でも有数の漁場で、カニやサケ、昆布などの豊かな水産資源が眠っている可能性もあります。加えて、近年は北極海航路の利用が注目されており、地理的にとても重要な場所としての意味も増しています。つまり、北方領土は単なる島ではなく、日本にとっても、ロシアにとっても大切な場所だからこそ、返還は簡単ではないのです。

日本は長い間、外交を通して解決を目指してきました。冷戦時代には話し合いが進まず、一九九〇年代には首脳会談も行われ、希望が持たれた時代もありました。しかし実際には大きな進展はなく、近年ではロシアが北方領土に軍事基地を建設するなど、むしろ状況は厳しくなっています。現在北方領土には日本人は住んでいません。元島民の平均年齢が八九歳と高齢化が進む中、ロシアによるウクライナ侵攻の影響などで先祖の墓を訪れる「北方領土墓参」も中断されています。

では、私たちはどう向きあえばよいのでしょうか。大切なのは、北方領土問題を「昔の出来事」ではなく、「今も続いている問題」として考えることだと思います。元島民の方々の話を聞き、その思いを知ることは、問題を風化させないために欠かせません。また、日本の立場を国際社会に理解してもらえるように努力し、同時にロシアとの対話を続けていくことも必要です。文化交流や経済協力を通じて信頼関係を築き、解決の道を探ることが大切だと思います。

北方領土問題は、すぐに答えが出るものではありません。しかし、だからといってあきらめてはいけません。ふるさとを失った人々の思いを心に刻み、日本の領土を守るという強い気持ちを持ち続けることが大切です。そして、私たち一人一人がこの問題に関心を持ち、次の世代へと語り継ぐことこそが、第一歩になるのだと思います。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

もしも北方領土が故郷（ふるさと）だったら

京都市立勧修中学校
一年　辰己　心香月

皆さんは、「北方領土」と聞き、どのようなことを思い浮かべますか。今回、私は、もし北方領土が自分の故郷だったらと考えてみました。遠くて身近ではないのでイメージが湧きにくいかもしれませんが、この問題は後々、私たちの未来にも関わってくる大切なことです。

北方領土とは北海道の北東にある四つの島のことで、それぞれ、択捉島・国後島・色丹島・歯舞群島などがあります。北方領土には美しい海や豊かな自然が広がり、自然の恵みが沢山あるこの土地は、昔から日本の大切な場所でした。

では、なぜこの島々が今、日本のものではないのでしょうか。北方領土は、昔から日本の領土として守られてきました。しかし、第二次世界大戦の終わりに、旧ソ連（現在のロシア）がこの島々を占領しました。そのため、多くの日本人が大切な故郷を離れなければならなかったのです。それから、日本とロシアはこの島の返還について話し合いを続けていますが、今もこの問題は解決していません。

法律の面から見ても国際法やいくつかの条約では、北方領土は日本固有の領土であるとされています。今も日本は、法に基づいて島の所有権を主張しています。これはただの「土地」の問題ではなく、日本の主権や国の正当な権利を守ることなのです。

現在もなお、北方領土には帰れない元島民の人々がいます。彼らは故郷を取り戻すために長い間、努力をしてきています。私たち若い世代も、この「北方領土問題」に関心を持ち、歴史や国際関係について学び、未来の平和を築く役割を担っています。

私はこの問題について、次のように考えます。北方領土は、遠く離れた場所にあるように見えても、私たち日本人の大切な「ふるさと」です。この問題を知り、関心を持つことで、平和的な解決につながると信じています。

そこで、私自身に置きかえて想像してみました。もし私が、急に「この町には住めません」と言われたとします。そう考えるといつも歩いている見慣れた道、友達の声、家族と囲む食卓の景色、学校生活。そんな当たり前が一瞬で消えてしまうという現実を見ることになります。私が住む京都にも、長い歴史と文化があり、たくさんの思い出があります。だからこそ、北方領土を失った人たちの悲しみを共感できた気がしました。

最後になりますが、私は将来、北方領土が日本の故郷として戻ってくる日を願っています。

しかし、そのためにはただ願うだけでなく、現実的な課題を知り、関心を持ち続けることが大切です。北方領土への価値観を日本人として高めていきたいという思いと、北方領土の意味が少しずつ自分の中に根づいてきました。

優秀賞（京都新聞賞）

私たちとのつながり

南丹市立殿田中学校
二年　蔵　心遥

北方領土がある周辺の海は、親潮と黒潮がぶつかり合う世界有数の好漁場だ。サケ、マス、スケトウダラをはじめタラバガニ、ハナサキガニやホタテ貝など、私が好きなお寿司のネタの宝庫になっている。また江戸時代には、北前船がこの地域の昆布を大阪に運んでいた。私が住む西日本には昆布で出汁を取る文化があり、調べていくうちに知らなかった北方領土と自分たちのつながりがわかった。しかし、北方領土は日本固有の領土であるにも関わらず、現在ロシアに不法占拠されており、それが八十年以上も続いている。

この間、この大切な海での漁業はロシアとの交渉がないとできない状況が続いてきた。さらに、この漁業を巡る状況は年々厳しさを増している。日本とロシアの間には北方領土の近くで安全に漁が出来るように話し合う「北方四島周辺水域における安全操業協定」などいくつかのルールがある。しかし二〇二二年二月にロシアがウクライナへの軍事侵攻を始めてから、日本とロシアの関係が悪くなってしまった。その結果、二〇二四年を含め三年連続で、漁師の方達が島周辺で安全漁ができるための話し合いができていない。水産庁は早期再開に向けてロシア側に呼びかけているが進展はない。

私が住んでいる京都府にある舞鶴湾は天然の良港と言われており、季節ごとに様々な海産物が水揚げされている。私たちの食卓には舞鶴かまぼこのように、地域の食材を活かした伝統的な料理も並ぶ。それは地域の誇りであり文化そのものだ。しかし京料理のうま味をとる昆布は、北方領土をはじめとする北海道が産地だ。ということは、北方領土周辺の海で自由に操業できないということは、私たち自身の問題でもあるということになる。

こうした深刻な問題がある一方で、北方領土問題は私たちの世代の中で少しずつ認知度が下がり無関心になってきているように感じる。学校で学ぶ機会はあるが、遠い場所の出来事のように思われ、日常生活の中で話題になることは少ない。けれど、この問題で苦しんでいる人たちが今もいる。それが、北方領土に住んでいた元島民の方々だ。元島民の方々は、自分たちの故郷に自由に帰ることができないまま、高齢化が進んでいる。故郷の海や山、家族との思い出を胸に、長い年月を待ち続けている思いを考えると、とても胸が痛い。また、北方領土には人々の暮らしの中で育まれてきた独自の文化があった。しかし、島に人が住まなくなり、時がたつにつれて、そうした文化も少しずつ失われてしまっている。このまま問題が解決されなければ、土地だけでなく、そこで生きてきた人々の記憶や文化まで消えてしまうかもしれない。だから私は、北方領土問題を遠くの出来事としてではなく、私たち自身の生活とつながっている問題として考えたい。私たちが毎日食べている魚や、受け継がれてきた日本の食文化は、北方領土の海と深く結びついている。また、元島民の方々の「帰りたい」という思いは、誰もが持つ「ふるさとを大切に思う気持ち」と同じだ。この問題を知り、考え、忘れないでいることは、今を生きる私たちにできる大切な行動だ。北方領土問題を自分のこととして受け止め、次の世代へ伝えていくことで、失われかけている思いや文化を未来につなげていきたい。

優秀賞（京都新聞賞）

北方領土問題で私たちにできること

京都市立嵯峨中学校
一年　古川　一歩

北海道の北東部にある日本固有の領土の北方領土。この島々の近海は水産資源が豊かでかつて多くの日本人が住んでいました。そんな北方領土は、一九四五年にソビエト連邦に占領されてから、現在までロシアが不法に占拠した状態となっています。

北方領土問題では、それぞれの国の意見があることによって、たくさんの話し合いがされてきました。私は、なぜ多くの会議をしてきたのに北方領土問題が解決しないのかを考えました。

一つ目は「ビザなし交流」についてです。ビザなし交流とは、領土問題解決までの間、お互いの理解を深め、北方領土問題解決に貢献することを目標としている取り組みです。この取り組みによって、ロシア人の考え方や文化を知ることができ、ロシア人のことを身近に感じるきっかけとなると考えました。

しかし、このビザなし交流が二〇二〇年から中止となりました。そうなったことによって、現在のロシアの状態がわからなくなり、日本もロシアもお互いの悪い部分しか見えなくなっているのではないかと考えました。

二つ目は、ロシアとウクライナとの戦争です。ロシアが戦争をしているため、交渉もできずに日本とロシアに不穏な空気が立ち込めています。そして、最近ではロシアと貿易をする国も減ってきていて、日本もそのうちの一カ国です。

私は、ロシアだけではなく、日本ももう少し改善をしていったら、問題解決に一歩近づくと思いました。

そこで、私たち日本国民が北方領土問題を解決するために何ができるのか。私が思う大切なことは、主に二つあります。

一つ目は、日本とロシア、それぞれの意見を知ることです。なぜかというと、それぞれの意見を知ることによって、それぞれの国の事を深く考えるきっかけになり、お互いの国のことを詳しく知ることができると思ったからです。

二つ目は、北方領土についての知識をもっと持つことです。北方領土の歴史や、現在の状況を詳しく学び、北方領土の現状をどんどん知っていきたいです。

しかし、私たち日本人だけではこの北方領土問題は解決できません。そこで、私は、日本の学生とロシアの学生が交流する機会を作るべきだと思いました。私たちとロシアの学生は、北方領土について教えられてきたことは全く違うと思います。だから、交流を通し、両国の意見を比べて、まとめることが大切です。そうすることで、二つの国が平和に暮らせるのではないかと思います。

このように、問題を解決するためには交流というものがキーワードとなってくるのではないかと思いました。

最後に、自分自身が、北方領土問題解決のためにできることを四つ考えました。

一つ目は、国の問題について興味を持つことです。日頃からニュースを見るなどして、自分ごととして捉えていきたいです。

二つ目は、他の国を知ることです。他国の現状を知ることで、日本と何か結びつくものが見つかると思ったからです。

三つ目は、言語学習に進んで取り組むことです。今の時代は通訳アプリなどの便利なものがありますが、自分で伝えることによって説得力が生み出されると思うからです。

四つ目は、他国の文化を尊重し、差別をしないことです。この領土問題をはじめ、国際問題に向き合う時は、相手の国について理解しないといけません。もし、相手を悪く言ってしまったら問題を大きくしてしまう可能性があります。日頃から相手を尊重し領土問題の解決と世界平和を願い続けていきたいです。

優秀賞（ＫＢＳ京都賞）

北方領土について

京丹波町立瑞穂中学校
二年　土屋　野依人

私は、北方領土について、小学校の頃に聞いたことはあったが、中学校に入って初めて詳しく学びました。

北方領土問題とは、八十年前から続く日本とロシアの領土問題です。

日本は一九四五年八月十五日にポツダム宣言を受諾した。しかし、ソ連は一九四一年に結んだお互いの領土の保全や侵略しないことを約束する日ソ中立条約を破り、九月五日まで攻撃を続け北方領土を占拠しました。そして一九五一年にサンフランシスコ講和条約が締結され、日本は樺太の南半分、千島列島の二つ、そして北方領土の四島を全て取られてしまい、現在も北方領土は不正に占拠されたままです。

北方領土問題についての学習を通して、強く思ったことは、今まで暮らしてきた故郷の島を突然追い出され、お墓を壊されたりしている人々がとてもかわいそうだと思ったことです。また、今でも北方領土に行けない、帰れないのも悲しいと思います。最近、ニュースで「ビザ無し交流」などが行われていたのを見かけましたが、そもそも北方領土は、日本の土地であり、そのようなことをする必要がないと感じました。

今回の北方領土について学んだことで、戦争は国と国との問題だけでなく、その地域の人々にも大きな影響を及ぼすということを知りました。大きな視点では政治的な問題かもしれませんが、その地域に住んでいる人々にとっては、ずっと暮らしてきた土地を奪われたりすることはとても辛いことだと感じました。

領土を奪い合うことは、生活してきた町で家族や友人との思い出が詰まった場所を奪い合うということなので、国同士がもっと早く話し合いを進め、平和的な解決へ向かうことを願います。そして、僕たちも他人事だと思わずに関心を持ち続けることが大切だと思います。

さらに、国際社会の中で領土問題を解決することの難しさについても考えさせられました。国と国にはそれぞれの歴史や主張があり、簡単に妥協点を見つけることはできません。しかし、だからこそ、対話を継続し、平和的に解決する姿勢を持ち続けることが重要だと思います。もし武力で解決しようとすればさらに多くの犠牲が生まれ、同じ過ちを繰り返すことになります。歴史から学び、争いではなく対話によって未来を築く姿勢が必要だと強く感じました。

今回の学習を通して、僕は領土問題だけでなく、平和の尊さについても改めて考えました。戦争や対立は一度起きてしまえば長い間人々を苦しめ続けます。だからこそ平和を守り続ける努力が必要です。自分自身も平和の大切さを周りの人たちにも伝えていきたいと思います。

優秀賞（ＫＢＳ京都賞）

忘れてはならないこと

京都市立音羽中学校
三年　藤原　宏太

三年と六ヶ月前、それは小学生の僕にはあまりに衝撃的な出来事だった。ウクライナ侵攻である。

テレビで毎日のように死者数や戦況が報じられる。貧困などによって、戦争が行われている国があるということは、少しだが知っていた。だが、ロシアという大国との間でこのような残虐行為が繰り返されている様子は、八〇〇〇キロ以上も離れている日本からでも、かなりの恐怖心を抱いた。ニュースで、現地ウクライナの人たちが大粒の涙を流しながら、インタビューに応えている姿を見ると、何か力になりたいと思っていた。

しかし、三年以上が経った今、僕はその状況を忘れそうになっていた。

原因は、ニュースで流れる回数が少し減ったことや、中学生になってから、深く歴史を勉強し、「戦争」というものに慣れてしまったことなどにある。反省した僕は、インターネットでウクライナや戦争の様子を調べることにした。停戦の話もあるようだが、戦争は続いているようだ。そうして調べているうちに、もう一度、ウクライナのことを初めて知って感じたあの時の気持ちを取り戻すことができた。

それとは別に、僕は北方領土の問題についても、この作文を書くために調べていた。

歴史的背景も知らなかった僕は、北方領土問題を「北方領土がどっちの領地なのか、取り合いをしているのかな」と考えていた。しかし、調べた結果は、日本の領土だった島をロシアが不法占拠したということだった。さらに、八八〇〇人以上の北方領土に住んでいた日本人が強制退去されたそうだ。

もし、僕が住んでいた場所がこのような目に遭ったら、混乱するだろうし、ロシアへの強い憎しみを持つと思う。日本も解決しなければと思っているようだが、そこから八〇年も経ってしまっている。以前住んでいた人たちは、高齢になられた今でも、返還に向けた取り組みを行っておられる。

僕はこの作文を通して、北方領土問題について知ることができ、日本全体で協力して解決すべき問題だと思った。そのためには、たくさんの人にこの問題の深刻さについて知ってもらわなければならないと思う。

僕自身は、ウクライナのことを忘れてしまうなどという失態はもう起こしてはならないと心に決めた。なぜなら、せっかくウクライナの問題をどうにかしようと思っていた人が、時が経ち、僕のように忘れてしまうと、現地の人達だけが早く終わってほしいと思ってしまい、その力は非力になると思ったからだ。

北方領土問題もそれと同じで、どうにかしようと思っている人たちが高齢化していく一方で、話はうまく進まない。だからこそ、今の北方領土の状況を周りの人達に伝えたりして、同じ志を持つ人を増やしたい。それが日本全体としての取り組みにつながればよいな、と僕は思う。

特別賞（京都府北方領土教育者会議会長賞）

北方領土の現状

京都府立須知高等学校
一年　矢田　優芽

私は、今回公共の授業で北方領土問題について学びました。北方領土とは、北海道の北東に位置する歯舞群島・色丹島・国後島・択捉島の四つの島を指します。これらの島々は歴史的にも日本の領土であり、一度も外国のものになったことはありません。しかし、第二次世界大戦の終わりごろ、当時のソ連が条約を無視して一方的に占拠し、島に住んでいた日本人は強制的に退去させられました。島を追われた人々は長い年月がたった今でも故郷に戻ることができず、多くの人が高齢となり、帰郷の夢を果たせないまま亡くなっているという現実があります。

私はこの出来事を知ったとき、とても強い衝撃を受けました。これまでの私は「戦争は過去のこと」「もう終わったこと」と思い込み、どこか他人事のように感じていました。しかし、北方領土問題を通して、戦争の影響は今もなお続いているという事実を知り、戦後という時代が決して「完全な平和」ではなかったのだと気づかされました。また、近年ではロシアとの関係が悪化しており、領土問題の解決がさらに難しくなっている現状も学びました。そうした状況を知ると、ただ「仕方ない」と諦めてしまう人も多いかもしれませんが、私はこの問題を放置せず、今の私たちが正しい知識を持ち続けることこそが大切だと感じました。

今回の学習で特に印象に残ったのは、「北方領土を取り戻すためには、元島民の方々だけでなく、全国の日本人が一丸となって声を上げる必要がある」という言葉です。自分にはどうしようもない、遠い問題だと思っていたけれど、日本の一部の土地が今も他国に占拠されたままであるという現実は、私たち一人ひとりに関係することなのだと気づかされました。自分たちの国の領土について関心をもつことは、同時に平和を守る意識を持つことにもつながるのだと思います。

これから私は、北方領土問題を「難しい政治の話」として片づけるのではなく、日本の歴史や平和について考えるきっかけとして向き合っていきたいです。ニュースやネットを通して関心を持ち続け、この問題だけでなく、世界で起きているさまざまな出来事にも目を向け、自分の意見をしっかり持てるようになりたいと思います。そして、いつか私たちの世代がこの問題の解決に向けて行動できるように、今のうちから知識を深め、関心を持ち続ける努力をしていきたいです。

特別賞（京都府北方領土教育者会議会長賞）

北方領土と日本の問題

京都市立久世中学校
一年　李　美姫

「北方領土」という語句を初めて聞いたのは、小学生のころだった。もしかすると、それ以前にも聞いたことはあったかもしれないが興味がなく覚えていない。「北方領土」のことが気になりだしたのは、つい最近のことだ。きっかけは、ささいなことだった。それは、この作文のことをお母さんに伝えたときのことだ。北方領土がテーマだと伝えた私に対してお母さんは「難しいテーマだね」とポツリとつぶやいた。私は大人でも真剣に考えてしまうような問題なんだなと驚いた。

歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の四つの島は現在、ロシアが不法に占拠している。かつて、多くの日本人が北方領土に住んでいた。しかし、一九四五年八月九日、ソ連軍が北方領土へ侵攻し、住んでいた日本人は逃げるしかなかった。私は、早く北方領土を日本の領域にできるようロシアとの交渉を続けてほしい。

北方領土が日本の領域となれば、住んでいた人々は故郷に帰れるようになる。それに、現在、日本が抱えている問題も解決できると思う。例えば、米の不足や食料自給率の問題だ。土地が増えれば畑や田んぼをつくることができ、米や野菜などを生産することができる。また、北方領土近海は水産資源が豊かなので、漁業も盛んになるだろう。

反対に、もし返還されなければ、占拠されてから八十年が過ぎてしまい、かつて住んでいた多くの人々が、故郷に帰れぬまま、亡くなってしまうだろう。また、北方領土の四島には、日本人の墓がたくさんある。もうすぐお盆になるので、墓参りに行く人も多いと思うが、北方領土に墓がある人たちは行きたくても行けないのだ。

今すぐにロシアが北方領土を手放すというのは難しい。だが、一九六四年からは墓参りに行くことができていたのだ。新型コロナウイルスの流行により、二〇二〇年以降は墓参りができなくなった。しかし、今は新型コロナウイルスの流行も落ち着いた。だから、昔のように墓参りだけでもできるようにしてほしい。そうでなければ、北方領土に墓がある人は、少なくとも五年は墓参りに行くことができていないことになる。

また、返還運動の象徴的存在である元島民は、すでに多くの方が亡くなっている。このままでは返還運動をする人も減っていき、北方領土の返還は遠のいてしまうだろう。

現在、ロシアは北方領土で水産業などを行い、経済発展している。それに対して、日本は竹島などの領有をめぐってロシア以外の国とも交渉をしている。日本は島国なので、領海の面積は大きいが、領土の面積は小さい。だから、日本の領土を広げるためにも北方領土が返還される日を願っている。

私は、北方領土が日本の領域となり、住んでいた人々が戻れるようになってほしい。しかし、今では北方領土が故郷・地元というロシア人もいる。だから、ビザなしで北方領土を自由に行き来できるようにし、ロシア人と日本人がともに住み、生活できるような島にしてほしい。それを実現するには、歴史や文化、言語の壁を超えなければならない。とても難しいことだが、実現していってほしい。そして、実現するために若い人に北方領土のことを知ってもらうことが重要だと思う。だからこの作文コンクールのような活動を広めるなど、自分にできることをしていこうと思う。

佳作

私のふるさと

南丹市立殿田中学校
二年　小畠　うた

「ぬくもりそのもの。」それが私のふるさと日吉だ。私は日々の生活のなかで温かさを感じて生活している。その中で私は地域の人とのコミュニケーションを大切にしている。日吉町の人口は約四千三百人と、とても少ないが、だからこそ一人一人の存在感は強い。地域の人との些細な会話がお互いの存在感の証だと思う。「行ってきます」「行ってらっしゃい」「ただいま」「おかえり」こんな当たり前のようで当たり前じゃない会話ができることが、私のふるさと日吉町の強みであると思った。そして私にとってふるさとという存在はとても大切なものだと実感した。

そんなふるさとを守る大前提になっているのが「国家主権」だ。他のどの国にも干渉されず、安心して暮らすことができるための力だ。しかし今、北方領土はロシアが不法に占拠し、自国の領土であると主張している。これまでロシア側と締結してきたどの条約を見ても、北方四島が他国の領土になったことはない。それなのに、元島民の方々から主権を奪い、追い出し自分たちのものにしているのが北方領土の今だ。これがまかり通ってしまったら自分たちのふるさともしかしたら外国の軍隊にせめられ帰れなくなるかもしれない。私が大切にしてきた地域の人たちとの温かい関りが根こそぎ奪われてしまうのだ。被害にあった方々は日本の人口のほんの一部かもしれないが、これは日本の問題であり、日本人である私たち一人一人の問題で、将来の問題であるともいえる。

大切なふるさとを守るために、私たち二年生は私たちが住んでいる日吉町について学んだ。日吉町は自然が綺麗だったり地域の温かさなど素晴らしいところがある。それは日吉町を大切にしてきた人々の思いがあってこそだと思う。でもその一方で少子化や伝統行事、伝統食を引き継ぐものがいないなど日吉町には課題がたくさんある。これらの課題を解決するために、たくさん情報を発信することが必要だと考えている。またこれは北方領土問題も同じだと思う。情報を発信し、認知度を高め北方領土が日本の領土になるとどんないいことがあるのかを広めることで、自分たちにメリットがあるとなると協力してくれる人が増えると思う。だが元島民の方々の高齢化が進んでおり、話を聞ける機会が少なくなってきている。

この問題は私たち若い世代が引き継がなければならない。未来を担う私たちがこの北方領土問題を「過去の歴史」にせず、解決に向けて関心を持ち続ける責任があると思う。私はまだ中学生だが、家族や友人などに北方領土について話してみるなど身近なことでできることはたくさんある。たとえ私一人の力は小さいものかもしれないがその小さな力が集まればいずれ大きなものに変化し北方領土問題解決につながるかもしれない。そして小さい子供たちが大きくなったころにはもっとたくさんの人が北方領土を知っていると嬉しい。いつか元島民の方々が大好きなふるさと北方領土に帰れるように北方領土問題を自分ごととして考え続けていきたい。大切なふるさとを守るために。

佳作

つないでいく　北方領土問題

南丹市立殿田中学校
二年　高橋　彩芽

「北方領土って何？」つい数ヶ月前の私は、こんな状態だった。でも今は、このままではいけない、自分にできることはないかと考えている。学校の授業や近畿ブロック少年少女研修会を通して学んでからだ。

「今、北方領土に住んでいるロシア人全てが悪い人ではない。」私はこれを聞き驚いた。この話を聞く前は、ロシア人全てが悪い人と思い込んでいた。「日本人にこんな辛い思いをさせて申し訳ない」と涙ながらに謝るロシア人もいるということを知った。一方、突然ふるさとを奪われてしまった元島民の方のお話は胸を締めつけられるようなものだった。オンライン越しにでも、目の前で語られた真実を自分の身に置き換えると、恐ろしくてたまらなかった。そして、もっとたくさんの人にこの問題を知ってほしいと思った。

世界は北方領土のことをどんな風に認識しているのかを知るために、他の国の地図を調べてみた。北方領土が日本の領土と示されている地図はほとんどなかった。日本と友好的な国でさえも北方領土は日本の領土と書かれていなかったことにはショックを受けた。その上、令和五年度に内閣府が実施した世論調査によると、特に今の若者は北方領土問題に無関心だということがわかった。詳しい経緯がわからないからという理由が多かった。また、六割以上の人が北方領土返還運動へ参加したくないと答えた。

これらのことから分かるが、今、北方領土問題の重大さは薄れてきてしまっている。世界の多くの国は、この問題の存在すら認識していない。なぜ日本の土地が奪われているのに皆は自分事として捉えていないのだろうか。この状態を放置することは、私たち自身が安心して暮らせる未来を手放していくことと同じだ。「詳しい経緯が分からない」から無関心でいていいはずがない。ロシアとの関係性が難しい中だからこそ、世界に発信し、危機感を共有しなければならないのに、これではこの問題自体が消えてしまうと思った。

今私の学校で問題となっている「ヘルメット問題」。最近政府がヘルメットをつける事を義務化した。この問題は北方領土問題と似ているところがあると思う。私の学校の先生方は、ヘルメットの大切さを知っている。だからからこそ生徒に「ヘルメットは命を守るもの」と教えてくれる。しかし、生徒の一部にはその重大さをわからずに今でもヘルメットを被らず登校する生徒がいる。「自分が事故に遭うわけがない」、「ヘルメットを被ったところで変わることなんてない」と思っている人が多いのではないだろうか。命を失ってから気づいても手遅れだ。北方領土問題に置き換えても、「別に自分には関係ない」と思っている人が少なからずいるはずだ。だからこそ考え方を変えてほしい。「もし自分の故郷が奪われたら自分はどう思う？」、「もし家族と離れ離れになったら？」と。本当にこの問題が世界からも日本の中でも消えてしまい、取り返しがつかなくなってからでは遅いのだ。

北方領土問題から約八〇年が過ぎたが、この問題はまだ解決していない。しかし別の視点から考えると、北方領土問題の重大さは薄れているものの、こうして今でも私たち若者が学校で北方領土問題を学べている。これは今までたくさんの方が「少しでも次世代へこの問題を伝え、解決させよう」と思いをつなげてくれたからだと思う。だからこそ次は私たちなのだ。

私の弟は小学校五年生だ。私と同じ中学生になった時も、今と同じ、或いは今以上にこの問題をつないでいく熱をみんなが持っていてほしい。私に託されたバトンを私は必ず次の世代につないでいく。

佳作

誰かにとっての故郷

南丹市立園部中学校
二年　北村　美結

はじめて北方領土の問題を知ったのは、学校の授業やインターネットです。授業は、ロシアに不法占拠されているという事実やビザなし交流の動画を見て、インターネットでは簡単な解説動画で学びました。そのときは、「一度も他国のものになっていないのに占拠されるのはおかしいし、ロシアはなんて自分勝手なのだろう」と思っていました。でも、その反面、知ったところで何もできないし、自分には関係ない話だと考えていました。

そんなときに、第三十九回近畿ブロック少年少女北方領土研修に行ってみないかと声をかけられ、詳しく知れる良い機会だと思い参加を決めました。研修では、これまでよりも事実を詳しく学んだり、他校の方と交流して考えを深めることができました。模擬授業で、「北方領土を返せ」の考えに賛成か反対かを考える時間がありました。故郷に帰れない人がいるのはおかしいと考えた私は、「賛成」という意見でした。でも、今はロシアの人々にとっても故郷であるからということで反対の意見がありました。問題が難しくなっているのは、この部分で、どちらの国にとっても故郷だということです。簡単に解決できる問題ではないと改めて考えさせられました。そうはいっても実際に、元島民の方々が辛い思いをしているのは見過ごせない問題で、できるだけ早く解決する必要があると感じました。元島民の鈴木咲子さんの話で、当時の状況を詳しく知りました。

話の中で印象に残っているのは、「一日でも早く故郷に帰りたい。」という言葉です。この言葉を聞いたとき、誰もが当たり前に思うことだと思いました。この言葉が当たり前ではない方達がいるということに対して、北方領土の問題を軽く考えていた自分が恥ずかしく思えました。

私は、このような出来事を今後起こしてはいけないと考えると共に、「他人事」と思わず「自分事」だと思うことが大切だと感じました。でも、授業を学習するだけで終わっている人がいたり、全体的に認知度が低いというのが課題です。これまでは日本とロシアで外交交流や、ビザなし交流が行われていたのも中止になり、返還の目標にはなかなか近づけていないのが現状です。それでも何もしないのではなく、交流が難しい今でも知識を広めていくことはできます。

今、私たち中学生にできることは正しい知識を身につけて発信することです。北方領土に関するイベントに参加したり、ＳＮＳで調べたりするだけでも知識を増やすことができます。また私は、学んだことを家族や友人と共有し考えを深めたいです。この問題を解決するには、国民が一丸となり声を上げ続けることが必要と考えます。北方領土問題が起こって八〇年の今、日本とロシア、お互いの国が関心を持ち、理解を深めることが北方領土返還に近づいていくのではないでしょうか。

佳作

私たちと「同じ」

南丹市立園部中学校
二年　上野　陽菜

「どうせ自分には何もできひんし。」

それが北方領土問題に向き合う前の感想だった。島民の方が追い出され、故郷を奪われたこと、返還を求め続けているが実現できていないことは知っていた。また、占拠したロシアや今住んでいるロシア人にも「なぜそんなことをするのか」と怒りも湧いていた。でも、どこかで「自分とは関係のない、遠いことだ」とも捉えていた。

私がこの問題と真剣に向き合ったのは、社会の授業がきっかけだった。それまでは、北方領土についてほとんど知らなかった。周りの友人にも知らない人が多かった。授業や研修会で多くの事実を知り、とても驚いた。ここで問題なのは、世間の北方領土問題への関心の低さだ。過去の自分と同じで世間でも関心が低く、歴史や元島民の想いを知らない人が多い。「自分には何もできない」とマイナスに捉えたり、「もし自分だったら」と考えることができていないのだと思う。学ぶ前の私もそうだった。でも、今も返還を求め続ける方が、故郷へ帰りたいと願う方がいる。それが現状だ。返還には一人の想いでは足りない。国民全体が問題を正しく理解し、多くの想いで返還を求める必要がある。そのためには、島民の方の想いや歴史を語り継ぎ、裾野を広げることが重要だ。

北方領土問題といえば、島民の方が追い出され、ソ連軍に占拠されたりと嫌なことばかりが目につく。もちろんこれは事実であり、知っておかなければいけないことだ。でも、北方領土はそのような話だけではない。占拠される前には島民の方々の生活があった。家族とお菓子を食べ、きれいな情景を眺める。これは私たちの生活にも似通った部分があると感じた。細かなことは違えど、大きくは変わらない。日常の小さな幸せを伝えることこそがこの問題の解決に向けて重要だ。私たちの日常と似たところを広めることで北方領土を遠い問題と思わず、関心が高くなるはずだ。

また、元島民の方のお話の中にはロシア人に関してのものがあった。それまで、ロシアが占拠したのだからロシア人が悪いと思っていた。でも、お話の中にはロシアの親切な方がお菓子をくれたり、内密に機密情報を教えて北海道に逃がそうと試みた方がいたと知った。これを聞き、ロシア人の全員が悪い訳ではない、強制的に追い出し返還するのはおかしい、と感じるようになった。私は、このようなことも語り継ぐべきだと思う。

最後に、元島民の方はこう仰った。「何年何十年、長い時間をかけてもいいから互いが納得できる形で返還されてほしい」と。この想いを汲むために、一人一人が正しい知識を持ち、返還を求めなければいけない。「遠いこと」と思わず、「自分事」として考えるのが大切だと思う。そのためには、北方領土の負の部分だけでなく私たちにとっても身近な日常生活の些細な出来事も語り継ぎ、正しい考えで返還を求めなければいけない。

佳作

「自分ごと」としての北方領土

京丹波町立和知中学校
三年　井上　紗那

みなさんは北方領土についてどれくらい知っているだろうか。私は、社会の授業でロシアが北方領土を不法占拠していることは知っていたけど、それ以上のことを詳しく知らなかった。しかし、北方領土についての授業を通して、「この問題は私たちにも関わることだ」と気づくことができた。

北方領土とは、北海道の北東にある、国後島、択捉島、色丹島、歯舞群島の四つの島の総称である。これらは元々日本の領土だが、第二次世界大戦以降、ロシアに不法占拠されてしまった。これまで何度も日本は、返還を求めたが、ロシアは「北方領土は私たちの領土だ」と主張し続け、現在も返還されていない。さらに、現在は日本人は一人も住んでおらず、多くのロシア人がすんでいる。私はこのことを知り、なぜまだ解決できていないのか疑問に思った。確かに国同士で起こった問題の解決は簡単ではないのかもしれない。特に最近では、ロシアと他の国々との関係が悪化していて、日本との関係も難しくなっているため、北方領土についての話し合いも進んでいないのが現状だと知った。

しかし、私が一番心に残ったのは、島から追い出されてしまった元島民の人々の存在である。彼らは故郷に帰ることもできず、高齢者となった今も思い出の地を訪れることができなくなっている。自分ごととして捉えると、過去の思い出の地を訪れることができないことに苛立ちと悲しみの感情が生まれた。元島民の人々の気持ちに少しだけ近づけたような気がした。

このような思いを知り、私はこの問題を「昔のこと」ではなく、「今のこと」として考え直すことができた。授業やニュースの中の話ではなく、私たちの国である「日本」の一部が現在も帰ってきていない事は現実のことだ。この問題は、日本人としてしっかり考えるべき問題だと思う。

では、私たちにできることは何だろうか。私たち中学生ができることはほんのごく一部かもしれない。しかし、「知ること」「考えること」「関心を持つこと」は今すぐ取り組めることだ。たとえば、北方領土について学んだことを友達や家族と話し合ってみたり、二月七日の北方領土の日があることを広めることもその一つだと思う。毎年その日に、北方領土についてもう一度考えてみることが大切なのではないか。

北方領土問題は、今後もなかなか解決されないかもしれない。しかし、私たち日本国民が北方領土の歴史や現状について詳しく理解し、一人一人が自分にできることは何か、考える必要がある。そうすることが、少しずつでも解決につながるかもしれない。私自身も、これからも北方領土について学び、できることを探していきたいと思う。皆さんも北方領土について一緒に考えてみてほしい。

佳作

争いのない明るい平和な世界のために

京都市立嵯峨中学校
一年　福井　菖

「せめて四島の近くで慰霊したい」

この言葉を聞いて、あなたはどう感じますか。この言葉は、元島民の方が話していた言葉です。

僕は、このお盆休みに、福井の田舎にあるおじいちゃんのお墓に、親戚一同、供養しに行きました。周りのお墓に花が添えられ、きれいになっていて、他にも僕たちと同じように、供養しに来た人がいました。

次の日、テレビであるニュースが取り上げられているのを見ました。それは「北方領土洋上慰霊」です。これは、ロシアのウクライナ侵攻の影響で、日本人の元島民の方々が北方領土に行けなくなったため、北方領土近くの海で慰霊することです。元島民の方、約百名が一つの船に乗り、手を合わせているところが、テレビに映っていました。その映像を見て、僕は悔しい気持ちでいっぱいになりました。

なぜ僕たちはいつでもお墓参りができるのに、元島民の方はできないのだろう。

北方領土は日本の領土なのに、なぜ自由に行くことができないのだろう。

そう思い、自分で考えたり、インターネットで調べたりしました。その中で「せめて四島の近くで慰霊したい」という言葉から、元島民の「悲しみ」、「怒り」、「憎しみ」、「妥協」が伝わってきました。その人たちにとって、北方領土は、自分が生まれ育った土地、大切な故郷、そして家族や友人、大切な人の眠る場所である、そう気づかされました。だから、「北方領土を必ず取り返したい」と、とても強く感じました。

けれども、そこで疑問が生まれました。それは、「もし日本が今、北方領土を返還してもらえたとしたら、今その土地に住んでいる住人たちは、どうなるのだろう」という疑問でした。今、そこに住んでいる住人たちにとっても、北方領土は故郷なのに。今度は、僕たちがその人の大切な故郷を奪ってしまうことになってしまうのではないだろうか、と。

現在、北方領土には、ロシアで一番大きい工場、新しい空港、観光施設などがあり、ロシアでも欠かせない存在になっています。戦後八〇年、そこにはロシアのさまざまな新しい歴史が生まれ、新しい生命も生まれています。そんな場所が、急に完全に日本のものになってしまったらどうなるのだろう。僕は、きっとロシアの人たちにも悲しみ、怒り、憎しみが生まれると思います。それでは、本当に平和な世界とは言えないのではないだろうか、と。

この作文を書くにあたって二つ大切なことが見えてきました。

一つ目は、戦争は『恨み』しか生まないということです。現在、世界ではいろいろな場所で戦争が起こっています。お互いが攻撃し合い、他には何も生まれることはないのに…。

二つ目は、北方領土は、日本の故郷でも、ロシアの故郷でもあるということです。北方領土は日本固有の領土であり、ロシアに占領されているということは忘れてはいけないことですが、「返せ」とだけ主張するのは、良くないことだと感じました。北方領土問題を解決するには、ロシアと日本が話し合い、お互いが納得できる案を出すこと、そしてこれからの僕たちが北方領土について知り、解決策を出していくことが大切だと思いました。

『争いのない明るい平和な世界』のために、『僕はこれからも、北方領土について学び続ける。』そう誓いました。

佳作

自ら関心を持ち、学ぶことの継続

京都市立下京中学校
一年　吉田　匡

一九四五年にソ連軍が北方四島を占領し、多くの日本人が突然故郷を奪われてから、今年で〝八十年〟。

国家間の交渉だけでなく、住民同士で友好的な解決の糸口をつくろうと、ビザなし交流や、様々なアプローチがあったそうですが、新型コロナウイルスの拡大や、ロシアのウクライナ侵攻で停止したまま、動くに動けない厳しい状況が続いています。

どこまでも平行線で、大人が何年考えても未だに解決が難しい問題について、僕はこの作文で何を書けばいいのかと悩み、自分だけでは進まないので、家族と話してみました。

そうすると、僕は覚えていなかったのですが、去年の夏休み、北海道に旅行に行った際に立ち寄った、稚別の小さな定食屋さんに、北方領土の地図と、ポスターが貼ってあったと母が言いました。根室の方には、いたるところに返還の看板があって、普段から関心をもたれているそうです。

それを聞いたときに、北海道に住んでいる方々と、京都に住んでいる僕らの北方領土問題に対する意識や温度感には、大きな差があると感じました。街のそこかしこに返還の看板があって、それを毎日見ながら生活するなんて京都では考えられないので驚きました。北方領土問題は日本人全体が抱えること。この温度差は、少しずつ埋めていくべきだと思います。けれども、今の僕たちの普段の生活では、知ることも興味をもつことも少なく、何処か他人事のようで、身近な問題だとは認識しづらいです。考える機会が足りないです。

とにかく、もっと知らなければいけないと思い、北方領土についてのニュース動画をいくつか見ました。ロシアの大規模な工場が建ち、多くの雇用が生まれ、〝極東ロシア観光〟と、大陸からのロシア人観光客が増え、その裏で北海道が射程距離に入る軍事施設ができている。そんな展開の中で、「お墓参りに行きたい。」と、元島民の方がおっしゃっていて、強く心に響き、辛く、ぶつけようのない憤りを感じました。それと同時に、文の初めに、何十年考えても解決が難しい問題と書いたけれど、元島民の方にも同じ時が流れていて、このままなし崩しに時が流れたら、元島民の方がおられなくなってしまうと、今更ながら気付いて、これは大変なことだと思えてきました。

私たちに何ができるのか。現在、非常に動きづらい情勢ですが、歩み寄れる日が来ると信じないと前に進みません。今、できることは、北方領土返還を日本人が願い、忘れていないことを様々なコンテンツを使って、世界に知らせ続けることが大事だと思います。そして、自ら関心をもち、学ぶことを続けていかなければならないと思います。中学一年生の僕が思いつくのはこんなことしかありませんが、元島民の皆様が、お墓参りに行ける日が一日でも近づくよう行動していきたいです。

佳作

北方領土と私たち

京都市立洛南中学校
二年　中西　ゆう

私たちが住んでいる日本には、北方領土とよばれる島々があります。これらは、北海道の北東にある択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四つの島で、今はロシアが実効支配しています。第二次世界大戦から、日本とロシアの間で領土をめぐる交渉が続いていて、現在も解決していません。

この問題は、私たち一人一人にとっても重要なことだと思いました。なぜなら、領土に関わる問題は、ただの歴史的な問題だけでなく、私たちがどのように諸国と関わり、平和を守っていくかにも関係しているからです。例えば、私たちが歴史を学ぶことで過去の出来事を理解し、未来の平和を作るためにどうすればよいかを考えることができるからです。

もし、北方領土が日本に戻ってきたとしたら、私たちの生活にも影響を与えると思います。例えば、漁業や観光業が発展したりするかもしれないし、北方領土が戻ることで、地域住民との交流も深まり、平和的な関係が築かれることもあると思います。

しかし、問題の解決には時間がかかるかもしれません。日本とロシアが対話を続け、互いに尊重し合うことが大切です。北方領土問題はただの領土の争いだけでなく、私たちがどのように平和を守るか、隣国とどのように付き合うかにも関わる問題なのだと分かりました。

他にも調べてみると、北方領土には多くの日本人が住んでいたことが分かりました。しかし、戦後、北方領土が占拠されたことで、島に住んでいた人々は強制的に引き離されました。その結果、故郷をなくした多くの人々は、何も知らない離れた土地で新たに生活を始めなければならなくなりました。その時、島に住んでいた人々は、家族などと離れ離れにならないといけなかったり、大切な土地を失ったりしたことはすごく辛かったと思います。

北方領土が日本に戻れば、この辛い気持ちが、少しは良くなるかもしれません。そして、そのために、北方領土を取り返すために、私たちでもできることをやるのが大切だと思いました。

まずは、北方領土問題について知ることだと思います。例えば、ニュースなどでこの問題を耳にしたとき、自分には関係のないただの政治の問題と思うのではなく、そこに住んでいた人々の思いを感じるべきだと思いました。

最初、北方領土という言葉は、聞いたことはあったけれど、どんなことが問題になっているのか、何が大変なのかなどについてはほとんど知りませんでした。しかし、この問題について調べることで、どれだけ多くの人が苦しんだのか、そして、その解決には私たち一人一人の意識が大切なのだと分かりました。これからもこのような問題について学び、どうすれば平和が守れるのかを考え続けることが大切だと思いました。そして、自分には関係ないと思わずに、私たちにできることをして少しでも役に立てたらいいなと思いました。

佳作

北方領土への私たちの思い

京都市立勧修中学校
一年　後藤　さくら

「故郷を奪われた人たちはどんな気持ちなのか」ということを、北方領土問題について知ってからずっと思ってきた。故郷を奪われたら、悲しいに決まっているけど、もっと違う感情があるのではないかと思っていた。

ロシアは約八十年間、北方領土を不法に占領している。日本は、ロシアに北方領土の返還を求めているが、日露関係は悪化する一方で、現在交渉は中止されている。このままだと北方領土はロシアのものになってしまうと思う。私は、そんなことになったら嫌だと思っていたけれど、ただ思うだけで解決しようと行動には移さなかった。けれども、先週「ジョバンニの島」というアニメを観たことによって私の心は大きく揺れ動いた。このアニメは、北方領土を追い出された元島民の人たちを描いた実際の物語で、こんなことは絶対にあってはならないと強く感じさせられた。

しかし、実際にこのようなことは、ウクライナで起きてしまっている。ウクライナとロシアは二〇二二年から、領土をめぐって戦争をしている。この戦争では、多くの戦死者が出ている。戦争が始まってから約三年が経った今、ウクライナは領土の一一%を失っている。故郷を追われたウクライナの人たちは、北方領土に住んでいた元島民と同じ気持ちだと思う。

ある日、私はインターネットで、日本に避難してきたウクライナの人のインタビューをいくつか見た。そこには「故郷に帰りたい」という言葉が必ず出てきた。日本にいるという安心感よりも「故郷に帰りたい」という思いの方が強いことに、正直驚いた。でも、私はそのような経験をしたことがないから、そう思うだけで、実際に自分もその立場になったら、「故郷に帰りたい」と思うに違いない。だって、今まで生まれ育ってきた故郷には、たくさんの思い出があるからだ。なので「故郷を奪われる」ということは、思い出の場所がなくなる、ということと同じことだと思う。

元島民の人たちも思い出の場所に帰りたいと思っているに違いない。だから、その思い出の場所を取り戻すために、まずは故郷を取り戻さなければならない。私はまだ子どもだから直接関わることは難しいけれど、間接的にはなにかできると思う。悩みに悩んだ結果、一つの答えにたどり着くことができた。それは北方領土問題のことを「忘れない」ということだと思う。

簡単なことだけど、これが大切なことだと思う。時が経つにつれて、私たちの記憶から消えていくと、いつまでたっても解決できずに、また新たに領土を奪われるかもしれない。元島民の人たちの「故郷に帰りたい」という願いが、いつか実現する日まで私たちは決して北方領土問題のことを忘れてはいけない。「忘れない」ということが北方領土問題の解決につながる一歩となればいいなと私は思う。

佳作

約一万七千人の人権

京都市立開晴小中学校
七年　木下　早詠

北方領土について班で話し合った時、私は戸惑い、曖昧な答えしか返すことができませんでした。他の人も同じような反応で、少しもどかしい気持ちになりました。けれども、先生の説明を聞いて、そのもどかしい気持ちは一気に憂鬱な気持ちに変わったのです。

インターネット、学校での授業、教科書の三つの情報から北方領土について調べました。北方領土とは、北海道の北東にある歯舞群島・色丹島・国後島・択捉島の四島です。近海は、水産資源が豊かで、約一万七千人もの日本人が住んでいました。ですが、現在の北方領土は、日本との条約を無視して一方的に侵攻してきたソビエト連邦、現ロシアによって不法占拠されています。その結果、一万七千人いた日本人は立ち退かされ、現在の北方領土には日本人は居住していません。

けれども、本当にそれだけでしょうか。

私たち日本の主張は、北方四島を日本の固有の領土であると主張し、返還を求めています。一方ロシア側の主張は、北方領土はロシアの領土の一部となり、国際法によって確認されていると主張しています。

お互いに意見が食い違う中、私はもっと詳しく知る必要があると思い図書館へ行きました。そこで見つけた「日本の領土と国境」という本を手に取り読んでいくと、日本とロシアの深い関係性や、ロシアと交渉し続けていたその間の出来事が載っていました。他にも調べていくうちに、「根室市北方領土資料館」という施設があるということを知りました。

根室市北方領土資料館は、戦前の北方領土の「衣・食・住」を中心とした資料を展示しています。室内には、実際に生活されていた方々の様子が展示されていて、画像からでも分かるほど笑顔あふれる写真が何枚も展示されています。

そのたくさんの笑顔があった場所、思い出の場所を奪われてしまった元島民の方は、幼いころに起こった事を、攻め込まれたときの状況や悔しさ、恐怖を今でも鮮明に覚えていることでしょう。

私は北方領土について調べたことで、北方領土の今と昔、国同士の主張などの情報をたくさん知ることができました。それを知ったうえで私たちにできる事、やらなければいけない事はなんでしょうか。

一つ目は、北方領土問題について知ることです。詳しく知ることで、北方領土に対する考え方が変わるのではないかと思います。また、北方領土の現状を知ることで、今は中止されている「ビザなし交流」の再開につながるのではないかと思います。

二つ目は、当時、北方領土に住んでいた方の人権を考えたうえで、国民一人ひとりが「北方領土は日本の領土だ」と声を上げていかなければならないと考えます。

私がどれだけ当時の人々の気持ちを考えても、心から理解できるのは、実際に体験した人だけで、私がどれだけ頑張って調べても、表面に出ない悲劇はたくさんあります。

それでも、北方領土について最初に知った日の憂鬱な気持ちや悲しい気持ち、それをいつかなくしたいと思う気持ちがあれば、当時の人々だけでなく、大人、子ども関係なく国民一丸となって北方領土に向き合うことができるはず。そして、北方四島の返還が現実的な事になってくるのではないかと考えます。

第 20 回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞作文集

令和 8 年（2026 年）2 月 11 日発行

編集・発行　北方領土返還要求京都府民会議
〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町
京都府広報課内

京都府北方領土教育者会議
〒629-1116 京都府船井郡京丹波町市場丸ヶ野 4
京丹波町立和知中学校内

印　　刷　株式会社　田中プリント
〒600-8047 京都市下京区松原通麩屋町東入
石不動之町 677-2